

15 世紀北インドにおけるインド・イスラームの学術伝統
—— ダウラターバーディー作『サイイドたちの美德』を通して ——

Islamic Intellectual Tradition in Fifteenth-century North India:
Shihāb al-Dīn al-Dawlatābādī's *Manāqib al-Sādāt*

二 宮 文 子
Ayako NINOMIYA

Abstract During the reign of Sultan Ibrāhīm Sharqī (r. 1401–1440), ruler of a newly established Sharqī kingdom based on Jawnpur, a famed Indian qādi Shihāb al-Dīn Ahmad al-Dawlatābādī wrote the *Manāqib al-Sādāt*. This work remains unpublished, but might be one of the most widely read works by Dawlatābādī. It discusses the due respect to and merits of sayyids in the form of hadith commentary and refers to around 120 works of various disciplines. It quotes theological and jurisprudence works in Arabic and Persian anecdotes of former kings and intellectuals, such as Shams al-Dīn Iltutmish and Abū al-Hanīfa. Briefly introducing the author Shihāb al-Dīn al-Dawlatābādī and *Manāqib al-Sādāt*, this paper identifies the works that appear in *Manāqib al-Sādāt*, often in abridged titles, and then compares them with two lists of works referred to by two intellectuals in South Asia, one in the early half and another in the latter half of the fourteenth century. Through the analysis, this paper highlights that the intellectual tradition established in Delhi by the Tughluq period was inherited in regional kingdoms in the fifteenth century, while the topic and language of *Manāqib al-Sādāt* show a certain novelty.

Keywords Jawnpur (ジャウンプル), Sharqīs (シャルキー朝), Hanafi (ハナフィー派), Maturidi (マートウリーディー派), sayyid veneration (サイイド崇敬)

は じ め に

本稿は、シハーブッディーン・ダウラターバーディー (d. 849/1445) が著した『サイイドたちの美德』という作品の中で引用・参照されている文献の分析を通して、デリー・サルタナト時代の学術伝統について論じる。デリー・サルタナトは 14 世紀前半に大きく拡大し、一時はインド最南端を除く地域を征服した。しかし、その領土支配は 14 世紀半ばには揺らぎ始め、1340 年代にデカンとベンガルに、14 世紀末から 15 世紀初頭にかけてグジャラート、マールワールなど多くの地域にムスリムを君主とする王朝が成立した。ダウラターバーディーは、このような地方王朝の一つ、北インドのシャルキー朝 (1394-1479) で活動したウラマーである。15 世紀インドのムスリム地方王朝における学術や文化については、各地域独自の文化の発展、特に在地語を用いた文芸活動が近年注目を集めている [Orsini & Sheikh 2014]。また、地方王朝と地域文化の関係をとり上げた近年の研究として、ペルシア語を通じた広域交流に注目してデカンのムスリム諸王朝の宮廷文化を扱った [Flatt 2019]、14 世紀から 16 世紀初頭までのグジャラート地方の歴史を、経済圏や文化圏の成立という文脈で論じた [Sehikh 2010] が挙げられる。ただ、これまでの研究で取り上げられてきた文化は文学や宗教 (イスラームでは特にスーフィーの活動) が中心であり、イスラーム諸学についての具体的な検討はあまり見られない。『サイイドたちの美德』中で言及されている文献の分析は、そのような間隙を埋めるものである。この作品は大部ではないが、ハディース学を中心に多様なジャンルの文献 100 点以上が言及されており、ダウラターバーディーが活動した 15 世紀半ばの北インドにおけるアラビア語・ペルシア語の学術伝統の様相を知る手がかりを与えてくれる。本稿では最初に『サイイドたちの美德』の概要を紹介し、次に作中で引用・言及されている諸文献の比定と分析を行い、それらの文献と、14 世紀までにデリーを中心とした地域で用いられていた文献との比較検討を行う。これらの作業を通して、デリー・サルタナト期の学術の展開、特に、13 世紀初頭のデリー・サルタナトの成立以来、インドにおけるイスラーム文化の中心地であったデリーと、15 世紀の地方王朝における学術伝統の関係について考察していきたい。

I 『サイイドたちの美德』の概要

『サイイドたちの美德』(*Manāqib al-Sādāt*)¹⁾ の作者シハーブッディーン・ダウラターバーディー (Shihāb al-Dīn Aḥmad b. Shams al-Dīn ʿUmar al-Zawālī al-Dawlatābādī) は、ガズナにルーツを持つ家系の出身であり、自身はデカンのダウラターバードに生まれ、デ

1) 『サイイドたちの榮譽』(*Sharaf al-Sādāt*) あるいは『40 のハディース』(*Chihil Hadith*) と呼ばれることもある。後者の名称は、後に説明するように作品中で 40 のハディースが解説されていることによると推察される。

リーでも学んだ。著名な師匠として、デリーのマウラーナー・ホージャギー²⁾がいる。ダウラターバーディーは、14世紀末にティムールの攻撃を受けたデリーを離れ、シャルキー朝のイブラーヒーム・シャー (Ibrāhīm Shāh, r. 1401-40) 治下のジャウンプルに招かれて大カーディーとなり、同地で死亡した。没年には 842/1438 年, 848/1444-5 年など諸説ある [Saeed 1972: 184 n3]。ダウラターバーディーをジャウンプルに招いたイブラーヒーム・シャーは、シャルキー朝の三代目の君主である³⁾。彼はシャルキー朝の支配を確立し、またデリーのサイイド朝やベンガルへの遠征⁴⁾を行った。イブラーヒーム・シャーは学術振興にも熱心であり、彼の治世のジャウンプルは「第二のデリー」と呼ばれていたという [GI: II, 305]。ダウラターバーディーは、このようなイブラーヒーム時代を代表する知識人と位置付けられている [AA: 359-361; Ā'in: I, 432; GA (P): 131; GA (T): 171; GI: II, 305; NK: III, 14-16; Ahmad 1968: 196-197; Hussain 2017: 154; Nizami: EI2, al-Dawlatābādī: 154; Saeed 1972: 181-184]。ダウラターバーディーは、クルアーン注釈、法学、アラビア語文法、歴史、詩集などの分野で多くの作品を著したとされる。諸研究の中で彼の代表作としてよく挙げられるのは、ペルシア語のクルアーン注釈 *Baḥr al-Mawwāj*⁵⁾、イブン・ハージブ (Ibn al-Ḥājib, d. 1248) によるアラビア語文法書 *al-Kāfiyya* の注釈 (*Sharḥ al-Kāfiyya*, *Sharḥ al-Hindī* などと呼ばれる) などである⁶⁾ [Hadi 1995: 570]。

-
- 2) Mawlānā Khwājagī. 彼は、チシュティー派のナスィールッディーン・アワディー (Naṣīr al-Dīn Awadī, Chirāgh-i Delhi, d. 1356) の弟子であった [AA: 288-290; Saeed 1972: 247]。
- 3) ジャウンプルは、1359/60 年にスルタン・フィールーズシャー・トゥグルク (r. 1351-1388) によって建設された。1389 年にジャウンプルの支配者に任じられたマリク・サルワル (Malik Sarwar) が 1394 年に独立を認められたことがシャルキー朝の始まりとされる。シャルキー朝の名称は、マリク・サルワルが「東方のマリク」Malik al-Sharq の称号を与えられていたことに由来する。イブラーヒーム・シャーは、マリク・サルワルの後を継いだ養子のムバーラク・シャー (r. 1399-1401) の弟である。第 6 代フサイン・シャー (r. 1458-) が 1479 年にローディー朝に敗北し、ベンガルに亡命したことでシャルキー朝は滅びた。シャルキー朝に関しては、*Encyclopaedia of Islam* の関連項目、サイードとフサインによる研究を参照 [Burton-Page: EI2, *Djawnpur*; Hussain 2017; Nizami: EI2, *Sharkis*; Saeed 1972]。
- 4) ベンガルへの遠征は、1418 年と 1435 年 (あるいは 1433-4 年) の 2 回行われたとされる [Hussain 2017: 43-45]。
- 5) 題名については、*Bihār al-Mawwāj* という表記もみられる [Zadeh 2012: 572-573]。筆者は *Baḥr al-Mawwāj* の内容を確認できていないが、『サイイドたちの美德』の中ではクルアーンの章句が多く引用・解説されており、*Baḥr al-Mawwāj* の内容と関連性が高いと見られる。*Baḥr al-Mawwāj* の中では、詩人として知られるナフシャビー (Ḍiyā al-Dīn Nakhshabī, d. 1350) の *Tafsīr-i Mughnī* や、アブラハム・サマルカンディー、ナサフィー、ザマフシャリー、ファフルッディーン・ラーズイーのクルアーン注釈への言及が見られるという [Zadeh 2012: 573]。
- 6) アフマドは、ダウラターバーディーの著作として 7 点のアラビア語作品を示している [Ahmad 1968: 196-200, 230, 316, 371-372, 454, 471]。管見の限り、ダウラターバーディーの著作で出版されているのは、*Baḥr al-Mawwāj*, *al-Irshād* (アラビア語構文についての論考 [Ahmad 1968: 196-199]), *Muṣaddiq al-Faḍl* (*Qaṣida Bānat Su'ād* 注釈 [Ahmad 1968: 230, 471]), *Sharḥ al-Kāfiyya* [Ahmad 1968: 199-200] の 4 点のみである。

『サイイドたちの美德』は未刊行である。現在のところ、カタログ類から 31 点の写本の所蔵が確認できた（表 1 を参照）。南アジア以外の地域では、イギリスとイランにも所蔵がある⁷⁾。そのうち筆者が実見したのはインド共和国のアリーガル所蔵写本 4 点、ラールプル所蔵写本 4 点、トーンク所蔵写本 4 点と、テヘランの Majlis Library 所蔵写本⁸⁾の合計 13 点である。本稿の翻訳には、これまで調査できた写本の中ではテキストが整っていると判断したテヘランの Majlis Library 所蔵写本 (No. 14134, 1061/1650-1 年ラホール筆写, 略号 Te) とトーンクの Maulana Abul Kalam Azad Arabic and Persian Research Institute 所蔵写本 (Persian No. 1904-2435, 19 世紀?, 略号 To) を用いた。

本作は、短い序文と後書き、そして 10 の章から成る。各章は導入部分、ハディース解説、逸話から構成され、章ごとに 4 つのハディースが引用・解説されており、全体で 40 のハディースの解説が行われるという構成になっている。各章の内容は以下の通りである。

- 第 1 章 預言者の子孫たちへの友愛 [Te: 2a-11a; To: 2-15]
- 第 2 章 預言者の子孫たちを愛するものたちへの吉報 [Te: 11a-13b; To: 15-21]
- 第 3 章 預言者の子孫たちの保護 (ra'āyat) [Te: 13b-19b; To: 21-36]
- 第 4 章 預言者の子孫たちの美德 [Te: 19b-27a; To: 36-53]
- 第 5 章 アリー裔とサイイドの系譜はファーティマから（繋がるもの）であることの証明 [Te: 27a-29b; To: 53-60]
- 第 6 章 サイイドの近親となることによって預言者に繋がること [Te: 29b-33b; To: 60-70]
- 第 7 章 サイイドたちとファーティマの尊称 [Te: 33b-38a; To: 70-81]
- 第 8 章 サイイドは決して背教者 (kāfir) にならないこと [Te: 38a-40b; To: 81-90]
- 第 9 章 サイイドたちとファーティマについての決まり (manshūr) [Te: 40b-43a; To: 90-97]
- 第 10 章 ヤズィードやそれに類するものたちへの呪詛 (la'n) [Te: 43a-54b; To: 97-141]

章のタイトルからも分かる通り、『サイイドたちの美德』の中では、サイイドの尊さや、サイイドを保護することがイスラームの教えの中で正当化されること、サイイドにまつわるさまざまな規定が、アラビア語文献の引用⁹⁾とペルシア語による翻訳・解説、そして逸話を通して説かれている¹⁰⁾。問答形式の叙述も見られ、特に第 10 章には長い問答部分が見られ

7) ブハラあるいはコーカンドで筆写されたとみられる写本の存在も報告されているが、所蔵情報は不明である。この写本は、ナクシュバンディー・ムジャッディディーのスーフィー、ファズル・アフマド (Faḍl Aḥmad Ma'sūmī, d. 1814) のリサーラや、16 世紀北インドのロウシャン運動の指導者バーヤズィード・アンサーリー (Bāyazīd 'Anṣārī, d. 1585) の神学論なども含んでいるという [Ziad 2017: 123]。

8) この写本は東京大学東洋文化研究所の森本一夫氏のご厚意により提供いただいた。

9) アラビア語部分は、先行作品の単純な引用や要約ではない可能性もある。この点については今後の検討課題である。

10) 『サイイドたちの美德』の内容については別稿で論じている [二宮 2023]。

表1 『サイドたちの美德』写本情報

所在地	図書館・所蔵先	写本番号	備考
London, England	British Library	I. O. D. P. 109	1194/1779 Sorey vol. 1 pt. 1, p. 211
Aligarh, India (4)	Maulana Azad Library, Aligarh Muslim University	University Collection, fārsī madhhab wa taṣawwuf, 267	65ff, Shekasta, 1200/1786 年 最終ページ欠
		University Collection, fārsī madhhab wa taṣawwuf, 268	42ff, Shekasta, 1313/1895 年 中間部に穴あき
		Ahsan Collection, fārsī, taḍkira, 920/42	34ff, Shekasta, 1102/1691 年 8章以降のみ
		Subhān Allāh Collection, fārsī, fiqr, 297-7/82 (297-3/31)	57ff, Shekasta ? Sorey vol. 1 pt. 2, p. 1261
Hyderabad, India (3)	Āṣāfiyah Library	Catalogue vol. 1, No. 577	Sorey vol. 1 pt. 1, p. 211
		Catalogue vol. 2, No. 71	Sorey vol. 1 pt. 1, p. 211
		Catalogue vol. 2, No. 76	Sorey vol. 1 pt. 1, p. 211
Kolkata, India (2)	Asiatic Society	Curzon collection, no. I 514 (Catalogue No. 371)	22ff, 1103/1691 年 <i>Tarjumah-i Chihil Ḥadīth</i>
	National Library	Buhār Collection, No. 18	164ff, Nasta'liq, A. D. 1889 Sorey vol. 1 pt. 1, p. 211
Patna, India	Khuda Bakhsh Oriental Public Library	Abdul Muqtadir, <i>Catalogue of the Arabic and Persian Manuscripts</i> , vol. 14, No. 1187	50ff, Ta'liq, 19 th century <i>Sharaf al-Sādāt</i>
Rampur, India (4)	Raza Library*	Persian, No. 1959	59ff, 994/1585 年?
		Persian, No. 1960	77 ff
		Persian, No. 1961	1170/1756 年
		Persian, No. 1962	112 ff, Shekasta
Tonk, India (4)	Maulana Abul Kalam Azad Arabic Persian Research Institute	Persian, 1904-1132	
		Persian, 1904-2435	145 ff
		Persian, 1904-2444/1	
		Persian, 1904-4522	
Mashhad, Iran	Kitāb-khānah-i Āstān-i Quds-i Ridawī	Mss. No. 35	Sorey vol. 1 pt. 2, p. 1261
Tehran, Iran	Majlis Library	14134	1061/1650-1 年, Lahore
Hyderabad, Pakistan**	Provincial Museum	866	
Islamabad, Pakistan	Ganj Bakhsh	2242	Shekasta, 1323/1962 年
Karachi, Pakistan	National Museum	1958-922	Nasta'liq, 1254/1838-9 年 <i>Sharaf al-Sādāt</i>
Lahore, Pakistan (3)	Shirani Collection, Punjab University Library	3950/907	995/1587 年 <i>Sharaf al-Sādāt</i>
		3996/944/1	1242/1826 年 <i>Chihil Ḥadīth</i>
		4091/1039/1	1238/1878 年 <i>Chihil Ḥadīth</i>
Peshawar, Pakistan (2)	個人蔵		
	Richard Office	86	Nasta'liq, 1263/1846-7 年
Quetta, Pakistan	個人蔵		
Sargodha, Pakistan	Anjuman Rabwa		Nasta'liq, 1280/1863-4 年

* カタログでは1963番もダウラターバーディー作とされているが、筆者が実見したところ同名の別作品であった
(*Catalogue of Persian Manuscripts*, Rampur Raza Library, 1996, vol. 1, p. 599)。

** パキスタンでの所蔵に関しては、Munzawiによるカタログを参照した [Munzawi 1983-1992: vol. 2, No. 2086]。

る [Te: 45a-6a; To: 102-135]¹¹⁾。ペルシア語の使用は本作の大きな特徴である。本作はハディース解説の体裁をとっており、法学の議論への言及もあるため全体にアラビア語の引用が多用されているが、適宜ペルシア語の翻訳が付されており、ペルシア語を読む層に向けた普及の意図があったことが窺われる。さらに、サイド保護の方法として彼らを従者にするのが薦められていること、ペルシア語の逸話の主な登場人物に、市井の人物だけではなくよく知られた支配者や知識人が目立つことなどから、本作の主な読者として支配者層が想定されていると推察される¹²⁾。また、写本の分布からみて、本作は南アジアを超えて読まれていたと見られる。

II 『サイドたちの美德』から見るインド・イスラームの学術伝統

本節では、『サイドたちの美德』内に見られる作品名の比定に基づく分析を行う。作品名の比定の結果は表 2 にまとめた。この比定においては、アラビア語文献リスト (Brockelman 1937-1949, 表での略号は GAL), ペルシア語文献リスト (Storey 1970-, 表での略号は Storey) に加え、デリー・サルタナト時代の学識の概要を知るために有用な文献リスト 2 点を主に参照した。アーンスト (C. Ernst) によるリスト (略号 E, E リスト) は、チシュティー派のスーフィー、ルクヌッディーン・カーシャーニー (Rukn al-Dīn Kāshānī, d. after 1337) が著したスーフィズムの解説書 *Shamā'il al-Atqiyā wa Dalā'il al-Anqiyā* の冒頭に列挙されている文献をアーンストが検討・整理したもので、一部重複や、スーフィー何某の言葉、のように単独の作品とは見做し難いようなものも含め、257 点が含まれている [Ernst 2004: 251-263]。ルクヌッディーン・カーシャーニーは、ニザームッディーン・アウリヤーの弟子でダウラターバードに移住して活動したブルハヌッディーン・ガリーブ (Burhān al-Dīn Gharīb, d. 1337) の弟子である。彼を含む 4 人兄弟は全員ブルハヌッディーン・ガリーブの弟子であり、4 名中 3 名がブルハヌッディーン・ガリーブの語録を作成した¹³⁾。彼ら兄弟はダウラターバードでトゥグルク朝の行政に関わっていたと推察されている [Ernst 2004: 138-141]。E リストはデカンで作成されたものだが、1330 年前後のダウラターバードのムスリム知識人はデリー周辺をはじめとする北インドからの移住者が中心であったと推察されるため、イスラーム関連の学術状況は同時代の北インドと大きな違いはないと考えてよいだろう。E リストの元になった文献の列挙には特に説明がないが、アーンストは

11) テヘラン写本にはフォリオ順の乱れが見られ、フォリオ 53 と 54 の間にフォリオ 5-6 が入る。

12) 後述するデリー・サルタナトのスルタンや知識人のほか、アブー・ハニーファや、サッファール朝のアムル・ブン・ライス (r. 879-901, 「バルフの王」とも呼ばれている) が登場する逸話が複数見られる [Te: 13b, 19b, 29a, 33a-b; To: 21, 36-37, 59-60, 70]。なお、本作の成立については、別稿において論じている [二宮 2023: 58-61]。

13) ルクヌッディーンはクルアーン注釈も著している。

表2 ダウラターバーディー作『サイイドたちの美德』内で言及されている文献一覧

	『サイイドたちの美德』中での呼称	著者名・作品名の推定	登場数	参考文献・備考
1	(Fatāwā) al-‘Attābiyya	<i>Kitāb Jāmi’ al-Fiqh</i> by Zayn al-Dīn Aḥmad b. Muḥammad b. ‘Umar al-Bukhārī al-‘Attābī (d. 1190)	2	GALS I 643, S-71, FTK
2	Aḥsan al-‘Ādāb		1	Persian
3	Akhbār al-Nahār (Te)/al-Anār (To)		2	
4	Ākhir Zāhiri		1	
5	‘Aqida (al-‘Uqla of Imām al-Ṣaghānī, author of Mashāriq)	work by Raḍī al-Dīn al-Hasan al-Saghānī (d. 1252)?	2	
6	Arba‘in		1	S-44-46?
7	‘Aziz al-Siyar (To)/‘Arab al-Siyar (Te)	(Story of Sha‘bī)	1	Persian
8	Bustān	<i>Bustān al-‘Arifīn</i> by Muḥyi al-Dīn Abū Zakariyā Yahyā b. Sharaf al-Nawawī (d. 1277)?	1	GAL I 397, S-9
9	Dastūr al-Ḥaqā‘iq of Fakhr al-Dīn al-Rāzī (d. 1209)		5	GAL I 506
10	Dhakhira	<i>Dhakhirat al-Fiqh</i> by Burhān al-Dīn Abū al-Ma‘ālī Maḥmūd Ṣadr al-Sharī‘a b. Māza al-Bukhārī (d. 1174)?	4	GAL I 375, GAL SI 642, E-61, S-68, FTK, Persian or Arabic
11	Durar	<i>Durar al-Bihār</i> by Shams al-Dīn Muḥammad b. Yūsuf al-Qūnawī (d. 1386)?	6	GAL II 81, GAL SII 90
12	Farmān (To)	(Arabic — Persian dictionary?)	1	
13	Fatāwā al-Jurjānī (al-Qadima)	work by ‘Alī b. Muḥammad Sayyid Sharīf al-Jurjānī (d. 1413)?	1	Persian or Arabic
14	Fatāwā Kamil (To)		1	GAL SII 953?
15	Fatāwā al-Kubrā	<i>al-Fatāwā al-Kubrā</i> by Ḥusām al-Dīn b. Māza al-Ṣadr al-Bukhārī (al-Ṣadr al-Shahīd, d. 1141)	1	GALI 374, GAL SI 640, E-73
16	Fatāwā Qāḍikhān (al-Khāniyya)	<i>Fatāwā Qāḍikhān</i> by Ḥasan b. Manṣūr al-Farghānī Qāḍikhān (d. 1196)	2	GAL I 376, GAL SI 644, S-88, FTK
17	Fatāwā al-Ṣughrā	<i>Fatāwā al-Ṣughrā</i> by Ḥusām al-Dīn b. Māza al-Ṣadr al-Bukhārī or Yūsuf b. Aḥmad al-Khwārizmī (d. 1223)	1	GAL I 374, 380, GAL SI 640, S-93
18	Fatāwā al-Zahriyya/al-Zāhiriyya?	<i>Fatāwā al-Zahriyya</i> by Zāhir al-Dīn Ḥasan Marghinānī (d. 1203) or Zāhir al-Dīn al-Bukhārī (d. 1222)	3	GAL SI 651, S-96, FTK?, Persian or Arabic
19	Fawā'id Jalāliyya	<i>malḥūzāt</i> of Jalāl al-Dīn Bukhārī (d. 1384)	2	Persian
20	Hādī (To)	<i>Kitāb al-Hādī fī Uṣūl al-Dīn</i> by Jalāl al-Dīn ‘Umar b. Muḥammad al-Khabbāzī (d. 1292)?	1	(GAL SI 657)
21	Ḥafīziyya	<i>al-‘Aqīdat al-Ḥafīziyya (al-Umdat fī al-‘Aqā'id)</i> by al-Ḥafīz al-Dīn Abū al-Barakāt ‘Abd Allāh al-Nasafī (d. 1310)? Also see No. 82	1	GAL II 196, GAL SII 263, E-47
22	Hidāya	<i>Hidāyat al-Burhāniyya</i> by Burhān al-Dīn ‘Alī b. Abū Bakr al-Marginānī (d. 1197)	1	GAL SI 644, S-99, FTK
23	I‘lām al-Hudā	<i>I‘lām al-Hudā wa ‘Aqida Arbāb al-Tuqā</i> by Shihāb al-Dīn Abū Ḥafṣ ‘Umar al-Suhrawardī (d. 1234)	2	GAL I 440, GAL SI 789, E-57, S-13
24	Jāmi’ al-Fatāwā	<i>Jāmi’ al-Fatāwā</i> by Naṣīr al-Dīn Abū al-Qāsim Muḥammad b. Yūsuf al-Samarqandī (d. 1161)	1	S-103
25	Jāmi’ al-Jawāmi’	<i>Jāmi’ al-Jawāmi’ fī Tafsīr al-Qur‘ān</i> by Raḍī al-Dīn al-Faḍl b. al-Ḥasan al-Ṭabarsī (d. 1153)?	1	GAL I 405, FTK
26	Jāmi’ al-Ṣaghīr (To)	<i>Jāmi’ al-Saghīr</i> by Muḥammad b. al-Hasan al-Shaybānī (d. 805)	1	GAL I 172, E-65, S-106, FTK
27	Jawāhir-i Hasani (To)/Jawhar-i Husaynī (Te)		1	FTK?, Persian
28	Jawāmi’ al-Ḥikma		1	Persian
29	Kāfi	<i>al-Kāfi</i> by Abū al-Faḍl Muḥammad b. Muḥammad al-Sulamī al-Marwazī, al-Hakīm al-Shahīd (d. 945). Also see 80	2	S-107?, FTK
30	Kalīla Dimna	Persian translation by Nizām al-Dīn Naṣr Allāh b. Muḥammad (1144)?	1	Persian
31	Kanz al-Daqā‘iq	<i>Kanz al-Daqā‘iq fī al-Furū‘</i> by Ḥafīz al-Dīn Abū al-Barakāt ‘Abd Allāh al-Nasafī	1	GAL II 296 GAL SII 265, E-60, S-108
32	Kanz al-‘Ibād	<i>Kanz al-‘Ibād fī Sharḥ al-Awṛād</i> by ‘Alā’ al-Dīn ‘Alī b. Aḥmad al-Ghūrī (15c)?	1	GAI I 441, GAL SI 790, Persian or Arabic

表2 ダウラターバーディー作『サイドたちの美德』内で言及されている文献一覧 (つづき)

	『サイドたちの美德』中での呼称	著者名・作品名の推定	登場数	参考文献・備考
33	Kashf	See No. 34 and No. 35	1	
34	Kashf of Imām Muḥammad b. 'Alī (al-Makki)	work related to Abū Tālib Muḥammad b. 'Alī al-Makki (d. 998)?	1	S-109
35	Kashf al-Mahjūb	<i>Kashf al-Mahjūb</i> by 'Alī b. 'Uthmān al-Hujwiri (d. ca. 1072)?	2?	
36	Kashshāf	<i>al-Kashshāf 'an Haqā'iq al-Tanzil</i> by Abū al-Qāsim Maḥmūd b. 'Umar al-Zamakhshari (d. 1144) Also see No. 100	13	GAL I 290, GAL SI 507, E-4, S-160
37	Khaṣṣāf	work by Aḥmad b. 'Umar al-Khaṣṣāf (d. 874)? Also See No. 84	2	GAL I 173 Persian or Arabic
38	Khizānat al-Fiqh	<i>Khizānat al-Fiqh</i> by Abū al-Layth Naṣr b. Muḥammad al-Samarqandi (d. 983)	1	GAL I 196, GAL SI 347, E-66, S-110, FTK
39	Khizānat al-Jalāliyya	<i>maḥfūzāt</i> of Jalāl al-Dīn Bukhārī	3	
40	Khulāṣa	<i>Fatāwā al-Khulāṣa</i> by Iftikhār al-Dīn Tāhir b. Aḥmad al-Bukhārī (d. 1148) or <i>Khulāṣat al-Aḥkām bi-Sharā'it li-al-Imān wa al-Islām</i> by Abū Bakr Ishāq b. Taj al-Dīn Abū Ḥasan, Ibn al-Taj (d. after 1335) or <i>Khulāṣat Jawāhir al-Qurān fī Bayān Ma'āni al-Furqān</i> by Ibn al-Taj	3	Ahmad 1968, pp. 312, 270, S-81, FTK
41	Khulāṣat Sibb al-Shaykhayn		1	
42	Khulāṣat al-Siyar	<i>Khulāṣat Siyar Sayyid al-Bashar</i> by Muḥibb al-Dīn Abū al-'Abbās Aḥmad b. 'Alī al-Makki al-Ṭabari (d. 1294)?	1	GAL I 361, GAS SI 615, S-54, Persian or Arabic
43	Kifāyat Sha'bi	(Story of 'Amr b. al-Layth, r. 879-901)	2	S-185?, Persian
44	Kitāb al-Jawhar (To)/al-Jawāhir (Te)		1	
45	Kitāb al-Shahāda		1	
46	Lāmiya	<i>Lāmiyat al-'Ajam</i> by Mu'ayyad al-Dīn al-Tughrā'i or <i>Qasīdat al-Lāmiya fī al-Tawḥīd</i> by Sirāj al-Dīn 'Alī al-Farghāni al-Ushi (12c) or <i>Qasīdat al-Lāmiya</i> by Qāḍi 'Abd al-Muqtadir b. Qāḍi Ruḥn al-Dīn al-Kindī al-Dihlawi (d. 1388)? See No. 85	1?	Ahmad 1968, p. 479, E-52, S-153, Persian or Arabic
47	Ma'ālim al-Tanzil	<i>Kitāb Ma'ālim al-Tanzil</i> by Ḥusyan b. Mas'ūd al-Baghawi (d. 1117 or 1122)	1	GAL I 364, GALS I 622
48	Mabkiyāt? (To)/Mikyāt? (Te)		1	Persian
49	Madārik	<i>Madārik al-Tanzil wa Haqā'iq al-Ta'wil</i> by Ḥafīz al-Dīn Abū al-Barakāt 'Abd Allāh al-Nasaḥi	5	GAL II 197, GAL SII 267, S-161, Persian or Arabic
50	Ma'din		1	
51	Manāfi/Manāhij (Te)?	<i>Manāhij al-Ṭalibin fī Ma'ārif al-Ṣādiqin</i> (1377) by 'Alī b. al-Ḥusayn 'Alā al-Qazwini al-Hilālī?	2	Storey I 85, FTK, Persian
52	Maṣābiḥ	<i>Maṣābiḥ al-Sunna</i> by Ḥusayn b. Mas'ūd al-Baghawi	8	GAI SI 620, E-24, S-56, Persian or Arabic
53	Masā'il al-Rāzi (To)	<i>Masā'il al-Khamsūn fī Uṣūl al-Kalām</i> by Fakhr al-Dīn al-Rāzi (d. 1209)	1	GAL I 507
54	Mashāriq	<i>Mashāriq al-Anwār al-Nabawiyya</i> by Raḍi al-Dīn al-Ḥasan al-Ṣaghāni (d. 1252)	12	GAL I 361, GAL SI 613, Ahmad 1968, p. 48-49, 292, E-21, S-57
55	Mishkāt/Mashkūt? (To)	<i>Mishkāt al-Maṣābiḥ</i> (737/1337) by Walī al-Dīn Muḥammad al-Khaṭīb al-Ṭabrizi	5	GAL I 364, GAL II 195, Persian or Arabic
56	Mudmarāt	<i>Jāmi' al-Mudmarāt wa al-Mushkilāt</i> (1397) by Yūsuf b. 'Umar al-Ṣūfi al-Kādūrī (d. 1429)?	4	GAL I 175, E-62?, S-105?, FTK, Persian
57	Mughni	<i>al-Mughni fī Abwāb al-Tawḥīd wa al-'Adl</i> by Abū al-Ḥasan 'Abd al-Jabbār al-Hamadāni (d. 1024-5)? Also see No. 101	2	Ghaneabassiri 2008
58	Muḥiṭ	<i>al-Muḥiṭ al-Burhāni</i> by Burhān al-Dīn Abī al-Ma'ālī Maḥmūd Ṣadr al-Sharī'a b. Māza al-Bukhārī	4	GAL I 375, GAL SI 642
59	Multaqaṭ al-Nāṣiri	<i>Multaqaṭ fī al-Fatāwā al-Hanafīyya</i> by Nāṣir al-Dīn Abū al-Qāsim Muḥammad b. Yūsuf al-Samarqandi	1	GAL I 381, S-120, FTK
60	Muttafiq	Kitāb al-Muttafiq wa al-Muftariq by Abū Bakr Aḥmad Khaṭīb al-Baghdādī (d. 1071)?	1	GAL SI 564, E-59
61	Nāfi	<i>Fiqh al-Nāfi</i> by Nāṣir al-Dīn Abū al-Qāsim Muḥammad b. Yūsuf al-Samarqandi?	1	GAL I 381

表2 ダウラターバーディー作『サイドたちの美德』内で言及されている文献一覧 (つづき)

	『サイドたちの美德』中での呼称	著者名・作品名の推定	登場数	参考文献・備考
62	Nasafiyya	<i>al-Aqā'id</i> by Najm al-Dīn Abū Ḥafs 'Umar b. Muḥammad al-Nasafi (d. 1142)?	1	GAL I 427, GAL SI 758, E-53?, S-145
63	Nāṣiri (To)	See No. 59	1	Arabic and Persian
64	Nawādir (To)/Nawāzil (Te)	<i>Nawāzil min Fatāwā</i> by Abū al-Layth Naṣr b. Muḥammad al-Samarqandi (d. 983) or <i>Nawādir al-Fatāwā</i> or <i>Nawādir al-Hishām</i> ?	1	GAL I 196, S-124-126, FTK
65	Nikāt	(Arabic — Persian dictionary?)	1	
66	Qīṣaṣ Bukhārī		1	Persian
67	Qīṣaṣ Maslūba (To)		1	Persian
68	Qushayriyya	<i>al-Risāla al-Qushayriyya</i> by Abū al-Qāsim al-Qushayri (d. 1074)	1	
69	Rawḍa		3	
70	Rawḍat al-'Ulamā (To)/Darajat al-'Ulamā (Te)	<i>Rawḍat al-'Ulamā wa Nuzhat al-Fuḍalā'</i> by Abū al-Ḥasan 'Alī b. Yahyā al-Zandawaysī al-Bukhārī (d. 922)?	1	GAL SI 361, S-23
71	Rawḍat al-Zand	Same to No. 69?	1	
72	Risāla 'Abhari (To)/'Aharī (Te)		1	Persian
73	Risāla of Dīyā al-Dīn Baranī	Scholar during the Tughluq period	1	S-61, Persian
74	Risāla Ihtisāb		1	Persian
75	Risāla Khwāja Gurg	work by Khwāja Gurg or Karak (Suhrawardi sufi in Karah, d. 1309)	1	Persian
76	Ṣaḥīḥ Bukhārī	<i>Ṣaḥīḥ Bukhārī</i> by Muḥammad al-Bukhārī	1	
77	Ṣaḥīḥ Muslim	<i>Ṣaḥīḥ Muslim</i> by Muslim b. Ḥajjāj	1	Persian
78	Sharaf al-Nubuwwa	<i>Sharaf al-Nubuwwa</i> by Abū Sa'd 'Abd al-Malik b. Muḥammad al-Khargūshī al-Naysābūri (d. 1015-6)?	12	Storey I 175, Persian or Arabic
79	Sharḥ al-'Aqida of Sa'd al-Dīn	work related to Sa'd al-Dīn Muḥammad al-Ḥammūya (d. 1252-3)?	1	
80	(al-Kāfi) Sharḥ al-Bazdawī	<i>al-Kāfi Sharḥ al-Bazdawī</i> by Ḥusām al-Dīn Ḥusayn al-Saghnaqi (d. 1311-2)? Also see No. 29	3	S-107?, FTK
81	Sharḥ al-Farā'id al-Sirājiya	commentary on <i>al-Farā'id al-Sirājiya</i> by Sirāj al-Dīn al-Sajāwandī (d. 1203), see No. 91	1	GAL I 379, FTK?
82	Sharḥ al-Ḥāfiẓiyya	commentary on <i>al-'Aqīdat al-Ḥāfiẓiyya</i> by Ḥafīẓ al-Dīn Abū al-Barakāt 'Abd Allāh al-Nasafi (d. 1310)? See No. 21	2	
83	Sharḥ (Shurūḥ) al-Hidāya	by Qāḍī Hamīd al-Dīn Dihlawī (d. 1362)?	4	Ahmad 1968, pp. 312-313
84	Sharḥ al-Khaṣṣāf (To)	<i>Kitāb Sharḥ Adab al-Qāḍi</i> by Ḥusām al-Dīn 'Umar b. 'Abd al-'Azīz b. Māza? al-Bukhārī? Also see No. 37	2	
85	Sharḥ al-Lāmiya	commentary on No. 46	2	S-155, Persian or Arabic
86	Sharḥ Sulamī	work related to Muḥammad b. al-Ḥusayn al-Sulamī al-Naysābūri (d. 1021) or <i>Kitāb al-Tamhīd fī Bayān al-Tawhīd</i> by Abū Shakūr Muḥammad al-Sālimī? Also see No. 109	1	Persian
87	Sharḥ Sunan		1	Persian
88	Sharḥ al-Taḥāwī	work related to Abū Ja'far Aḥmad b. Muḥammad al-Taḥāwī (d. 933)?	1	
89	Sharḥ al-Ta'ārīf (To)/Sharḥ al-Ta'arruf (Te)	commentary on <i>Kitāb al-Ta'arruf li-Madhhab Ahl al-Taṣawwuf</i> by Abū Bakr b. Abī Ishāq Muḥammad al-Kalābādhi (10c)?	1	E-68
90	Shar'at al-Islām	<i>Sharā'ī al-Islām</i> by Najm al-Dīn Ja'far b. Ḥasan al-Hillī (d. 1326)?	2	GAL SI 514
91	Sirājiyya	<i>al-Farā'id al-Sirājiyya</i> by Sirāj al-Dīn al-Sajāwandī, Also see No. 81	1	GAL I 378
92	Siyar al-Kabīra (To)/al-Kabir (Te)	<i>Sīyar al-Kabīr</i> by Muḥammad b. al-Ḥasan al-Shaybānī?	1	GAL I 172, GAL SI 291, FTK
93	Sunan		2	
94	Tadhkirat al-Awliyā	<i>Tadhkirat al-Awliyā</i> by Farīd al-Dīn 'Aṭṭār (d. ca. 1230)?	1	Persian
95	Tafsīr of Abū al-Qāsim		1	Persian
96	Tafsīr 'Arūs (To)/'Arāis (Te)		1	Persian

表2 ダウラターバーディー作『サイドたちの美德』内で言及されている文献一覧 (つづき)

	『サイドたちの美德』中での呼称	著者名・作品名の推定	登場数	参考文献・備考
97	Tafsir al-Baṣā'ir (To)/Tafsir al-Baydawī (Te)	<i>Tafsir al-Baṣā'ir al-Yamīnī</i> by Mu'īn al-Dīn Muḥammad b. Maḥmūd al-Naysābūrī (d. 1153) or <i>Anwār al-Tanzil wa al-Asrār al-Ta'wīl</i> by Naṣīr al-Dīn 'Abd Allāh 'Umar b. Muḥammad al-Baydawī (d. 1286?)	1	Zadeh 2012, pp. 564-572, E-6, S-167
98	Tafsir al-Bukhārī		1	
99	Tafsir of Diyā al-Dīn Sunāmī (14c)	(Scholar during the Khalji/Tughluq period)	2	Persian
100	Tafsir al-Kashshāf	commentary of No. 35?	1	
101	Tafsir Mughnī (of Shaykh al-Shuyūkh)	<i>Tafsir-i Mughnī</i> by Diyā al-Dīn Nakhshabī (d. 1350) or commentary of No. 56?	2	Zadeh 2012, p. 572
102	Tafsir of (Imām) Najm al-Dīn	work by Najm al-Dīn Abū Ḥafṣ 'Umar b. Muḥammad al-Nasafī?	1	Persian
103	Tafsir al-Sulamī	work related to Muḥammad b. al-Ḥusayn al-Sulamī al-Naysābūrī or <i>Kitāb al-Tamhīd fī Bayān al-Tawhīd</i> by Abū Shakūr Muḥammad al-Sālimī? Also see No. 109	1	Persian
104	Taḥāwī	work by Abū Ja'far Aḥmad b. Muḥammad al-Taḥāwī (d. 933)?	1	
105	Tahdhīb al-Kāmil		1	Persian
106	Tāj	<i>Tāj al-'Arūs wa Qam' al-Nuṣūs</i> by Tāj al-Dīn Aḥmad Ibn 'Aṭā Allāh (d. 1309) or <i>Tāj al-Tarājīm fī Tafsīr li-al-A'ajīm</i> by 'Imād al-Dīn Abū al-Muzaffar Shāhūr al-Isfara'īnī (d. 1079)? Also see No. 107	1	GAL II 118, Zadeh 2012, p. 332
107	Tāj al-As'āmī	See No. 106	2	S-174
108	Tajnis		1	FTK?
109	Tamhīd (al-Sulamī)	<i>Kitāb al-Tamhīd fī Bayān al-Tawhīd</i> by Abū Shakūr Muḥammad al-Sālimī (11c) Also see No. 103	3	GAL I 419, GAL SI 744, E-55, S-158, FTK
110	Tanbih al-Qinān (To)/al-Fatabān? (Te)		1	Persian
111	Tārīkh (al-Mustabshir) of Abū al-Qāsim b. Muḥammad al-Ṣiddīq		2	
112	Tashrīḥ	See No. 113	10	Persian or Arabic
113	Tashrīḥ of al-Imām Fakhr al-Dīn al-Rāzī		2	S-164?
114	Tātār-khāniyya	<i>Fatāwā al-Tātār-khāniyya</i> by Farid al-Dīn 'Ālim b. al-'Alī al-Indarpatī (d. 1384-5)	3	Ahmad 1968, p. 315
115	Wāqidi (To)/Qudūri (Te)	work by Muḥammad b. 'Umar al-Wāqidi (d. 747) or Abū al-Ḥusayn Muḥammad al-Qudūri (1037)?	1	Persian
116	Wiqāya	<i>Wiqāya al-Riwāya bi-Masā'il al-Hidāya</i> by Burhān al-Dīn 'Ubayd Allāh b. Maḥmūd al-Maḥbūbī (13c)	1	GAL SI 646
117	Yanābī'	<i>al-Yanābī' fī Ma'rīfat al-Uṣūl wa al-Taḥāwī</i> (1323) by Rashīd al-Dīn Muḥammad b. Ramadān al-Rūmī al-Shiblī?	1	GAL I 175, FTK, Persian
118	Zād al-Arwāḥ		1	
119	Zād al-Fuqahā	<i>Zād al-Fuqahā fī Sharḥ al-Qudūri</i> by Abū al-Ma'ālī Bahā al-Dīn Muḥammad al-Isbijābī (d. 1194-5)?	1	S-143
120	Zāhidi	<i>Latā'if al-Tafsīr</i> by Abū Naṣr Aḥmad b. al-Ḥasan Sulaymānī al-Zāhidi (d. ca. 1125) or work by Mukhtār b. Maḥmūd al-Zāhidi al-Ghazminī (d. 1260)? Also see No. 121	5	GAI I 382, Zadeh 2012, pp. 571-572, Wheeler 2003 p. 194, E-5 or E-109, S-170, Persian or Arabic
121	Zāhidiyya	See No. 120	3	

略号で示されている文献の詳細は以下の通りである。

E : Appendix A. In: Ernst, C. W. *Eternal Garden* (2nd ed.), New Delhi: Oxford University Press, 2004, pp. 251-263.

FTK : Farid al-Dīn 'Ālim. *Fatāwā-yi firūz shāhī* 20 vols.. (ed.) Shabir Aḥmad al-Qāsimī. Deoband: Maktabat al-Zakariyā, 2014, vol. VII, pp. 281-400.

GAL : Brockelmann, C. *Geschichte der arabischen Literatur*. Brill, 1937-1949.

S : Appendix E. In: Steinfels, A. M. *Knowledge before Action*. Columbia: University of South Carolina Press, 2012, pp. 181-190.

Storey : Storey, C. A. *Persian Literature: A Bio-bibliographical Survey*. London: Luzac, 1970-.

Shamā'il al-Atqiyā の参考文献と位置付けた上で、デリー・サルタナト時代に用いられていたアラビア語・ペルシア語の宗教、神秘主義文献 (religious and mystical literature) の最も網羅的な列举と評価している [Ernst 2004: 75-76, 251]。一方、スタインフェルズ (A. Steinfels) によるリスト (略号 S, S リスト) には、14 世紀後半のスーフィー、ジャラルッディーン・ブハーリー (Jalāl al-Dīn Ḥusayn b. Aḥmad al-Bukhārī, d. 1384) の語録や伝記 6 点の中で言及されている作品 201 タイトルが含まれている¹⁴⁾ [Steinfels 2012: 181-190]。ジャラルッディーン・ブハーリーは、トゥグルク朝のスルタン・フィールーズシャー時代に活動した、ウッチュ (現パキスタン) 出身のスーフィーである。彼の祖父はムルターンのスフラワルディー派のパハーウッディーン・ザカリーヤー (Bahā' al-Dīn Zakariyā', d. 1262) の弟子であり、彼の家系は代々パハーウッディーンの子孫に弟子入りしている。また、ジャラルッディーンは 1341-2 年頃から 1348 年までアラビア半島に滞在し、アブドゥッラー・ヤーフィイー ('Abd Allāh Yafī'ī, d. 1367) などの高名な学者からハディース学や神学を学んだ。ジャラルッディーンの学識は、北インドに加えてアラビア半島においても培われたものであり、彼は当時最先端のイスラーム諸学を身につけた人物とみなせる。スタインフェルズは、ジャラルッディーンはハディース学を中心にイスラーム諸学を幅広く修め、スーフィズムだけではなくハディースや法学、神学の標準的な (standard) 文献を用いて教えるを説いたと論じている [Steinfels 2012: 64-70]。

E リストと S リストは両方ともスーフィーとされた人物が参照した文献に基づくため、スーフィズム文献への偏りが想定される。ただし、ハディース学や法学にも重きを置いたジャラルッディーン・ブハーリーの参考文献に基づく S リストは、イスラーム諸学に関する文献をよりバランスよく含んでいると予測される。また、ルクヌッディーンはスーフィーの弟子ではあるが専門的な学者とは言いがたく、一方でジャラルッディーン・ブハーリーは同時代の南アジアの中では突出した知識人の一人と言える。このような違いはあるが、これらのリストは両方とも、同時代の南アジアにおけるイスラーム諸学の標準的な文献を含むと評価されている。E リストは 14 世紀前半、S リストは 14 世紀後半の南アジアで参照されていたアラビア語・ペルシア語の学術的な文献をある程度体系的にカバーしたリストとみなしてよいだろう。これらのリストと『サイイドたちの美德』に見られる参照作品を比較して、14 世紀から 15 世紀にかけての南アジアにおける学術伝統の様相や、その中における『サイイドたちの美德』の位置付けの分析の助けとしたい。さらに表 2 では、フィールーズ・シャー・トゥグルク時代に編纂された『タータール・ハーンファトワー集』 (*Fatāwā al-Tātār-khāniyya*, 略号 FTK) の不信仰 (kufr) の章に見られる作品名との重複結果も示した。なお、表 2 にまとめた作品名の比定は、いくつかの例外を除けば、『サイイドたちの美德』テキスト中にみられる呼称や作者名に基づくものであり、『サイイドたちの

14) これらの語録については、[Steinfels 2012: 165-168] を参照されたい。

美德』に引用されている文章そのものが作品中にあることを確認しているわけではない。そのような作業は今後の課題である。また、引用部分が後世に付け加えられた可能性もあるが、今回の比定においては1440年代までに成立した作品を対象とした¹⁵⁾。

最も頻繁に言及されている作品はKashshāf (15回, No. 36)¹⁶⁾である。これはザマフシャリー (Abū al-Qāsim Maḥmūd b. ʿUmar al-Zamakhsharī, d. 1144) のタフスィール *al-Kashshāf ʿan Haqāʾiq al-Tanzil* と推察される。次に多く登場するのは, Mashāriq (12回, No. 54) や Sharaf al-Nubuwwa (11回, No. 78) である。前者はインドのハディース学最初期の成果とされるサガーニー (Raḍī al-Dīn al-Ḥasan al-Saghānī, d. 1252) の *Mashāriq al-Anwār al-Nabawiyya* であろう。後者の名称で呼ばれうる作品は複数あるが、参照されているのは、類似の作品の中では最もよく知られたハルゲーシー (Abū Saʿd ʿAbd al-Malik b. Muḥammad al-Khargūshī al-Naysābūrī, d. 1015-6) によるものか、ラーワンディー (Maḥmūd b. Muḥammad al-Rāwandī) によるそのペルシア語訳 (12世紀末～13世紀初頭成立) である可能性が高い [Arberry: EI2: al-Khargūshī; Storey 1970-: I, 175-176]。その他、頻繁に言及されている文献のうち高い蓋然性で推測できるのは、バガウィー (Ḥusayn b. Masʿūd al-Baghawī, d. 1117 or 1122) によるハディース集 *Maṣābiḥ al-Sunna* (Maṣābiḥ, 8回, No. 52), タブリーズイー (Shams al-Dīn Muḥammad al-Tabrizī, d. 1336) による *Maṣābiḥ al-Sunna* 注釈 *Mishkāṭ al-Maṣābiḥ* (Mishkāṭ, 8回, No. 55), アブルバラカート・ナサフィー (Ḥāfiẓ al-Dīn Abū al-Barakāt al-Nasafī, d. 1310) のタフスィール *Madārik al-Tanzil* (Madārik, 8回, No. 49), サグナーキー (Ḥusām al-Dīn Ḥusayn al-Saghnaqī, d. 1311-2) の *Kāfi Sharḥ al-Bazdawī* (Sharḥ al-Bazdawī, 3回, No. 80) である。Durar (8回, No. 11) については、ハナフィー派の法学者クーナウイー (Shams al-Dīn Muḥammad al-Qūnawī, d. 1386) の *Durar al-Biḥār* かもしれない¹⁷⁾。また、ラーズイー (Fakhr al-Dīn al-Rāzī, d. 1209)¹⁸⁾ の名前も見られるが、最も多く登場する Tashriḥ (10回, No. 112; 2回, No. 113) がどの作品を指しているのかは特定できていない。これらの作品のうち、Kashshāf, Mashāriq, Maṣābiḥ は E リストと S リスト両方に名前がある。また、Madārik

15) 写本間で作品の呼称が多少異なっている場合もあるが、本稿では原則としてトーンク写本の表記に基づいて集計した。作品の呼称の表記の違いの区別は表に記している。

16) 以下、作品名に言及する際の No. ○ という表記は本稿添付の表2の番号を示す。また、『サイドたちの美德』内での呼称は通常書体で表記し、呼称が単語一語である場合はアラビア語の冠詞 al- は省略した。

17) これらの作品と同程度回数言及されている Zāhidi (No. 120) という文献については、可能性が高い候補が決定できていない。Abū Naṣr Aḥmad b. al-Ḥasan Sulaymānī al-Zāhidi (d. ca. 1125), あるいは Mukhtār b. Maḥmūd al-Zāhidi al-Ghazminī (d. 1260) の作品かもしれない。Zāhidi という文献は E リストと S リストにも見られる。

18) 本文中に Fakhr al-Dīn al-Rāzī という名前が明示されているので、医師・哲学者の Abū Bakr al-Rāzī である可能性はひとまず排除した [Te: 17a; To: 22, 26, 29, 36]。ただし、テヘラン写本はラーズイーではなく Fakhr al-Dīn al-Hānsawī という人物の存在も示唆する [Te: 21a]。

と (al-Kāfi) *Sharḥ al-Bazdawī* は S リストにも含まれている¹⁹⁾。一方、作者が高い蓋然性で比定できる作品の中でどちらにも見られないのは *Mishkāṭ*, *Sharaf al-Nubuwwa* である。

一般に、南アジアにおいて優勢であった神学派、法学派はそれぞれマートウリーディー派、ハナフィー派とされる。本作において引用されている神学や法学の文献からも、その傾向を読み取ることができる。マートウリーディー派については、ナジュムッディーン・ナサフィー (Najm al-Dīn Abū Ḥafs ʿUmar b. Muḥammad al-Nasafi, d. 1142) の作品と見られる *Nasafiyya* (*al-ʿAqāʾid*, No. 62), サーリミー (Abū Shakūr Muḥammad al-Sālimī, 11c) の *Tamhid* (*Kitāb al-Tamhid fī Bayān al-Tawḥid*, No. 109), そして、アブルバラカート・ナサフィーの作品と見られる *Hāfiẓiyya* (*al-ʿAqīdat al-Hāfiẓiyya* (*al-ʿUmdat fī al-ʿAqāʾid*), No. 21) や *Kanz al-Daqaʾiq* (*Kanz al-Daqaʾiq*, No. 31), *Madārik* (*Madārik al-Tanzīl wa Ḥaqāʾiq al-Taʾwīl*, No. 49) が登場している²⁰⁾。*Nasafiyya* と *Tamhid* という名称は、フィールーズ・シャー・トゥグルク時代の文化・学術について記した *Sirat-i Firūz Shāhī* の中でイスラーム神学の基本書として挙げられている。*Tamhid* は新規改宗者への教義の説明に用いられていたという [SF: 122, 136, 144, 146]²¹⁾。これらの書籍は S リストにも同じ呼称で登場している²²⁾。これら 2 作品は、デリー・サルタナト初期から 15 世紀まで、北インドを中心とした地域におけるイスラーム神学の主要な参照書であったとみなしてよいであろう。E リストと S リストの中にはアブルバラカート・ナサフィーの作品も含まれており、14-15 世紀の南アジアにおけるマートウリーディー派の伝統の強さが窺える。

ハナフィー派については、シャイバーニー (Muḥammad b. al-Ḥasan al-Shaybānī, d. 805) の *Siyyar al-Kabīr* (No. 92) と *Jāmiʿ al-Ṣaghīr* (No. 26), マルワズィー (Abū al-Faḍl Muḥammad b. Muḥammad al-Sulāmī al-Marwazī, al-Ḥakīm al-Shahīd, d. 945) の *al-Kāfi* (No. 29), アブルライス・サマルカンディ (Abū al-Layth Naṣr b. Muḥammad al-Samarqandī, d. 983) の *Khizānat al-Fiqh* (No. 38), カーディーハーン (Ḥasan b. Manṣūr

19) ただし、S リストは *al-Kāfi* という書名について、*Sharḥ al-Bazdawī* と、後出するマルワズィー作の *al-Kāfi* のどちらかであろうという推察をしている。従って、S リストの *al-Kāfi* が *Sharḥ al-Bazdawī* ではない可能性もある [Steinfels 2012: 186]。

20) マートウリーディー派については、[Brodersen 2020] を参照した。

21) チシュティー派のスーフィー、ニザームッディーンは、師匠のファリドッディーンから *Tamhid* を教える免状を受け取ったとされる [SA: 117]。なお、『サイドたちの美德』内で *Tamhid* に言及されている箇所のうち、ヤズィードに対する呪詛をめぐる議論 [Te: 49b-50a; To: 118] は [Tamhid: 317] の記述と、タルハとズバイルに関する議論 [Te: 46a; To: 105] は [Tamhid: 315] の記述と対応すると推察される。また、信徒たちの序列に関する記述 [Te: 20a; To: 37-38] と類似の記述が [Tamhid: 311] に見られるが、論旨が完全に一致しているわけではない。

22) E リスト (E-55), S リスト (S-158) において、*Tamhid* は同じ呼称で登場する。また、E リストには Nasafi の *al-ʿAqīda* と呼ばれる作品 (E-47, E-53) が見られるが、アーンストはこの作品をアブルバラカート・ナサフィーによるものと解釈している [Ernst 2004: 255]。

al-Farghānī Qāḍikhān, d. 1196) の *Fatāwā Qāḍikhān* (Khāniyya, No. 16), マルギーナーニー (Burhān al-Dīn ‘Alī b. Abū Bakr al-Marghīnānī, d. 1197) の *Hidāyat al-Burhāniyya* (Hidāya, No. 22), サジャーワンディー (Sirāj al-Dīn al-Sajāwandī, d. 1203) の *al-Farā’id al-Sirājiyya* (Sirājiyya, No. 91) など、参照されている法学書の多くがハナフィー派のものである²³⁾。また、初期のハナフィー派法学者とされるクドゥーリー (Abū al-Ḥusayn/ al-Hasan Aḥmad b. Muḥammad al-Qudūrī, d. 1037) の作品の注釈と見られる文献 (Muḍmarāt²⁴⁾, No. 56; Yanābī’, No. 117; Zād al-Fuqahā No. 119) が複数言及されている点や²⁵⁾、ナスィールッディーン・サマルカンディー (Naṣīr al-Dīn Abū al-Qāsim Muḥammad b. Yūsuf al-Samarqandī, d. 1161) やブルハースッディーン・イブン・マーザ (Burhān al-Dīn Maḥmūd b. Muḥammad al-Bukhārī Ibn Māza, d. 1174) の作品と見られる文献が複数言及されている点が目を引く (Dhakhira, No. 10; Jāmi’ al-Fatāwā, No. 24; Muḥīt, No. 58; Multaqaṭ al-Nāṣiri, No. 59; Nāfi’, No. 61)。これらのうち、E リストと S リストの両方に含まれている作品は Dhakhira (No. 10), Khizānat al-Fiqh (No. 38) である。

南アジアにおける学術史の文脈で注目されるのは、『タータール・ハーンファトワー集』 (al-Tātār-khāniyya²⁶⁾, No. 114) の利用である。作品名が登場する回数は3回とそれほど多くないが、法学関係の議論でそれ以外の文献名が挙げられている部分が、実際には『タータール・ハーンファトワー集』からの孫引きという可能性がある²⁷⁾。また、『タータール・ハーンファトワー集』だけではなく、ハディース学者としても知られたジャラルッ

23) ハディース学や神学の著作が頻繁に言及されているバガウィーやラーズィー (No. 9, No. 49, No. 53, No. 112, No. 113) は、法学派においてはシャーフィイー派とされる。

24) 表2では、この文献をカードゥーリー (Yūsuf b. ‘Umar al-Ṣūfī al-Kādūrī, d. 1429) による *Jāmi’ al-Muḍmarāt wa al-Mushkilāt* (1397 年成立) に比定した。なお、E リスト (E-62) と S リスト (S-105) には Muḍmarāt と同じ語形の Muḍammarāt という作品名が見えるが、年代から考えるとカードゥーリーの作品とは別のものと考えるのが自然である。ただし、S リストは、カードゥーリーの作品のタイトルと極めて近い Jāmi’ al-Muḍammarāt という名称も挙げている。従って、S リストの元になった文献がジャラルッディーン・ブハーリーの死後の書き足しを含む、あるいは彼の死後に成立した可能性もある。同名で呼ばれる他作品の存在は確認できていない。

25) クドゥーリーの著作への注釈については [Wheeler 2003] を参照。

26) 写本での表記には、al-Tātār al-Khāniyya [Te: 18b, 27b], al-Tātār-khāniyya [To: 55, 67], al-Tātār-khānī [Te: 31b], al-Tātār al-Khānī [To: 34] など揺れがある。

27) 京都大学人文科学研究所の中西竜也氏のご教示による。孫引きの可能性が指摘されているのは、『サイドたちの美德』第6章に見える、婚姻における釣り合い (kafw) についての議論の箇所である [Te: 31b-33a; To: 66-69]。被征服民の間の釣り合いにおいて血筋ではなく宗教を重んじるという議論で Kāfi の名が登場しているが、その内容は少なくとも *al-Kāfi* の釣り合いの部分には見られないという (*al-Kāfi Sharḥ al-Bazdawī* には釣り合いを論じる項目はないため、未確認である)。一方、『タータール・ハーンファトワー集』の中では、*al-Kāfi* を典拠とするような形で同様の内容が論じられている [FTK: IV, 132]。なお、サラフスィー (Shams al-Dīn Muḥammad al-Sarakhsi, d. 1090) による *al-Kāfi* の注釈 *Kitāb al-Mabsūṭ* の釣り合いに関する項目には、被征服民の間の釣り合いに関する同様の議論が見られるというが、『サイドたちの美德』の中には *Kitāb al-Mabsūṭ* への言及はない。

ディーン・ブハーリーの語録とみられる作品 (Fawā'id Jalāliyya, No. 19; Khizānat al-Jalāliyya, No. 39)²⁸⁾ や、トゥグルク朝期の文人バラニー (Ḍiyā al-Dīn Baranī, d. after 1358) のリサーラ (Risāla, No. 73)²⁹⁾ など、トゥグルク朝期の作品の利用が目立つ。それ以外では、ハルジー朝期の学者スナーミー (Ḍiyā al-Dīn Sunāmī, 14c) のクルアーン注釈 (Tafsīr, No. 99) がある [Hadi 1995: 640]。

スーフイズムの面では、スフララルディー派の名祖シハーブッディーン (Shihāb al-Dīn Abū Ḥafs 'Umar al-Suhrawardī, d. 1234) の *I'lām al-Hudā wa 'Aqida Arbāb al-Tuqā* と見られる文献 (I'lām al-Hudā, No. 23) への言及が見られる。また、北インドのカラで活動したスフラワルディー派のスーフィー、ホージャ・グルグ (Khawāja Gurg or Karak, d. 1309) の著作 (Risāla, No. 75) が利用されている [Digby 1994; Digby 2004: 314-318]。2 作品が言及されているジャラルッディーン・ブハーリーもスフラワルディー派に連なるスーフィーである。ダウラターバーディーの師匠マウラーナー・ホージャギーはチシュティー派のスーフィーでもあり、ダウラターバーディーがスーフイズム関連の書籍を参照するのは不自然ではないが、チシュティー派ではなく、スフラワルディー派のスーフィーの著作が多く参照されている点は興味深い。*I'lām al-Hudā* は E リストと S リストにも見られるので、学術分野やスーフイズムの派を超えてよく読まれていたものと考えられるべきかもしれない³⁰⁾。しかし、現時点ではこの点をさらに分析する材料は乏しい。

『サイドたちの美德』の中で言及されている 121 作品のうち、E リストと共通する文献は 18 点、S リストと共通する文献は 36 点³¹⁾、『タータール・ハーンのファトワー集』と共通する文献は 20 点である。表 3 において、それぞれのリストとの重なりを整理したところ、いずれかと重なるものは 51 作品となった。E リスト、S リスト、『タータール・ハーンのファトワー集』全てと共通して登場する文献は Dakhira, Jāmi' al-Ṣaghīr, Khizānat al-Fiqh, Tamhid であり³²⁾、Tamhid は神学、他は全て法学分野の文献と考えられる。また、E リストと S リストと共通している文献 Kashshāf, Mashāriq, Maṣābiḥ はハディース学分野の文

28) これらの作品は、S リストの元にもなっている *Khizānat al-Fawā'id al-Jalāliyya* あるいは *Khizāna-yi Jawāhir-i Jalāliyya* であると推察される [Steinfels 2012: 181]。

29) S リストにもバラニーのリサーラが含まれる (S-61)。ただし、これらのリサーラの内容については確認していない。

30) 韻文作品である Lāmiya (No. 46) も E リスト (E-52), S リスト (S-153) 両方に含まれている。ただし、この呼称で呼ばれる作品は多く、『サイドたちの美德』で引用されているものは特定できていない。また、他のリストに含まれている同名の作品が全て同じものと断定することもできない。ダウラターバーディーが参照している Lāmiya は、師匠の一人であるアブドゥルムクタディル (Qāḍī 'Abd al-Muqtadir al-Kindī al-Dihlawī, d. 1388) が著した *Qaṣida al-Lāmiya* かもしれない [Ahmad 1968: 240, 479]。

31) 注 18) で指摘した通り、S リストは *al-Kāfi* と *Sharḥ al-Bazdawī* を区別していないので、合わせて 1 作品として数えた。

32) Muḍmarāt も全てのリスト・作品に見られるが、注 24) で指摘した問題があるためここでは外した。

表 3 『サイイドたちの美德』内で言及されている文献と先行リスト類との重複

	『サイイドたちの美德』内での呼称	E	S	FTK	登場数
10	Dhakhīra (1174)	E-61	S-68	○	4
26	Jāmi' al-Ṣaghīr (805)	E-65	S-106	○	1
38	Khizānat al-Fiqh (983)	E-66	S-110	○	1
109	Tamhid (11c)	E-55	S-158	○	3
23	Ilām al-Hudā (1234)	E-4	S-160		2
31	Kanz al-Daqā'iq (1310)	E-60	S-108		1
36	Kashshāf (1144)	E-143	S-160		13
46	al-Lāmiya (12c/1388)	E-52	S-153		1
52	Maṣābiḥ (1117 or 1122)	E-24	S-56		8
54	Mashāriq (1252)	E-21	S-57		12
62	Nasafiyya (1142)	E-53?	S-145		1
97	Tafsīr al-Basā'ir (1153/1286)	E-6	S-167		1
120	Zāhidi (1125/1260)	E-5	S-170		5
15	Fatāwā al-kubrā (1141)	E-73			1
21	Ḥafiziyya (1310)	E-47			1
60	Muttafiq 1071)	E-59			1
89	Sharḥ al-Ta'arīf/al-Ta'arruf	E-68			1
19	Fawā'id Jalāliyya (1384)		●		2
39	Khizānat al-Jalāliyya (1384)		●		3
1	(Fatāwā) al-'Attābiyya (1190)		S-71	○	2
16	Fatāwā Qāḍikhān (1196)		S-88	○	2
18	Fatāwā al-Zahriyya (1203/1222)		S-96	○	3
22	Hidāya (1197)		S-99	○	1
29	Kāfi		S107?	○	2
40	Khulāṣa (1148/1335)		S-81	○	3
59	Multaqaṭ al-Naṣiri (1161)		S-120	○	1
64	Nawādir (983)		S-124-126	○	1
80	Sharḥ al-Bazdawī (1311-2)		S-107?	○	3
6	Arba'in		S-23		1
8	Bustān (1277)		S-9		1
17	Fatāwā al-Ṣughrā (1223)		S-93		1
24	Jāmi' al-Fatāwā (1161)		S-103		1
34	Kashf (998/1072)?		S-109?		1
42	Khulāṣat al-Siyar (1294)		S-54		1
43	Kifāyat Sha'bī		S-185?		2
49	Madārik (1310)		S-161		5
70	Rawḍat al-'Ulamā (922)		S-23		1
73	Risāla, Ḍiyā al-Dīn Baranī (14c)		S-61		1
85	Sharḥ al-Lāmiya		S-155		2
107	Tāj al-As'āmī (1079/1309)?		S-174		2
113	Tashrīḥ, Fakhr al-Dīn al-Rāzī (1209)		S-164?		10
119	Zād al-Fuqahā (1194-5)		S-143		1
114	Tātār-khāniyya (1384-5)			●	3
25	Jāmi' al-Jawāmī (1153)			○	1
27	Jawāhir-i Ḥasanī			○	1
51	Manāfi' (1377)			○	2
81	Sharḥ al-Farā'id al-Sirājiyya			○	1
92	Siyar al-Kabira (805)			○	1
108	Tajnis			○	1
117	Yanābī (1323)			○	1

文献の呼称の後に入っている数字は推定された作者の没年あるいは作品成立年である。黒丸は当該のリストの元になった文献で、『サイイドたちの美德』の中に言及が見られるものを示す。

献である³³⁾。以上の文献は、南アジアの様々な分野の著作においてよく参照されていたものと位置づけられるだろう。また、先行リストと重複が見られる文献は複数回言及されることが多い傾向が見られる。なお、登場数が多く、先行リストと重複がない作品のうち、Durar (6 回, 1386 年成立?), Mishkāt (5 回, 1337 年成立), Sharḥ al-Hidāya (4 回, 1362 年成立) は 14 世紀中葉から後半に成立したものと推定できる。これらの作品が、先行リスト、特に 14 世紀半ばに成立したと見られる E リストに見られない要因の一つは年代であろう。

以上をまとめると、『サイイドたちの美德』は多様な文献を参照しているが、頻繁に言及されている作品の多くは先行の作品や知識人も利用・参照しているものであり、大筋においては 14 世紀までの北インドのムスリム社会における学術伝統にのっとっていたと言える。一方、1 つの作品でサイイドに関する事項を総合的に扱うというテーマ設定は、当時のペルシア語作品の中では目新しいものであったと推察される。ダウラターバーディーが『サイイドたちの美德』を著した当時、預言者ムハンマドやその一族、すなわちシーア派のイマームやサイイドの美質や彼らへの崇敬を扱う作品のほとんどはアラビア語を用いて書かれていた³⁴⁾。また、南アジアにおいては、トゥグルク朝期以前に『サイイドたちの美德』のようなまとまった分量でサイイド崇敬を論じる作品が存在した形跡は管見の限り確認されていない³⁵⁾。預言者ムハンマドに関する伝承の集成である *Sharaf al-Nubuwwa* の多用は、南アジア外のムハンマドやサイイドへの崇敬に関する議論を取り入れようという姿勢の表れと見るべきであろう。

お わ り に

『サイイドたちの美德』の中で参照されている作品の分析から、マートゥリーディー派やハナフィー派への傾倒や、『タータール・ハーンのファトワー集』の利用など、トゥグルク朝期までの学術伝統が地方王朝であるシャルキー朝でも受け継がれていたことが明らかとなった。さらに、『サイイドたちの美德』の中では、トゥグルク朝期までのデリー・サルタナトは、サイイド崇敬・保護の面においても従うべき手本と位置付けられている。これは、以下のようなスルタン・イルトゥトゥミシュの逸話が作品の最後に置かれていることから

33) 表 3 から得られる見通しとして、ジャラルッディーン・ブハーリーの作品は、後世の学術伝統の中で、スーフィズムよりもむしろハディース学や法学に関する議論の文脈において参照されている可能性がある。

34) ストーリーの 1 巻において、預言者だけではなくその子孫、とくにその美質 (merit) を扱っているとされるペルシア語作品のうち、15 世紀までに書かれたものは 2 作品である [Storey 1970: I, 182, 185–186]。サイイドの美質を扱った作品については、[Morimoto 2012: 23–24] も参照。

35) 『サイイドたちの美德』の中では、トゥグルク朝期にはクルアーン注釈やファトワーの形でサイイド崇敬が論じられていたことが示唆されている [二宮 2023: 62–63]。

窺うことができる³⁶⁾。

スルタン・シャムスッディーン（イルトゥトゥミシュ）の治世の初めには、デリーにはサイイドがあまりいなかった。ある日、老齢の異教徒であるヨガ行者がやってきて³⁷⁾、スルタンに面会した。スルタンは彼を気に入り、近臣に加え、いつも彼にイスラーム（への改宗）を勧めていた。ある日、異教徒は『ムハンマドは人間ですか、天使ですか』と尋ねた。スルタンは「人間だ」と答えた。異教徒は「彼に子孫がいるのなら、跪拝され崇敬されているでしょうね」と言った。スルタンは「彼の息子たちは二房の編み髪を持ち、サイイドと呼ばれている」と答えた。異教徒は嘆き、言った「王よ、我々の中で玉座に座る者の息子と呼ばれる人々に対し、それはあまりに些細な区別です。もし彼らが我々の行列の前に現れたなら、我々は心苦しく恥じる気持ちになるでしょう。王よ、自らが従う信仰を唱えた人物の子孫をこのように扱うなら、あなたには彼の代理権（khilafat）を主張することは禁じられ、相応しくありません。世界の避難所たる王よ、王の子息がこのように軽んじられる町には非難すべきことが生じ、荒廃するでしょう。……王よ、4つの願いがあります。もしあなたがそれらを承認するなら、あなたの信仰と代理権が正しくなり、できないなら忘恩と背教の方がましでしょう。彼らに対して恩賞と褒賞を与えてください。彼らが生活の悩みから解放されるでしょう。次に、できるなら彼らを従者（chakar）としてお抱えなさい。それによっても彼らが利益を得られましょう。3つ目は、できるならウラマーたちに以下のようなファトワーを出すように命じなさい。『ムハンマドには子孫はいない。もし自らをサイイドの生まれと称し、人々にそう呼ばせる者がいたら、彼の血が喉に流れ込むことになる（＝処刑される）だろう』。4つ目に、もしウラマーたちがこれを拒まず、このファトワーを嘘だと言わなかったら、また、もしこれら3つのことがあなたにとって難しければ、彼ら（サイイド）の権利を奪ったり、笑いものになったり呪詛や非難的になることのないように、あなたはかのお方の宗教を諦めて棄教しなさい」。誠に驚くべきことに、この異教徒は彼らの粗末な取り扱いについて、より適切なことを知っていたのである。スルタンは彼を抱きしめ、「このような聖者（wali）が、なぜ不信者のままなのか。そして、私がおのような扱いをしていて、どうして（イスラームの）信仰ができれば」と言った。そ

36) この逸話部分は、大意は変わらないものの、テヘラン写本とトーンク写本との間で細かなテキストの差異が多く見られる。

37) トーンク写本・テヘラン写本共に、原文は「jūgi sar āmadah gabri sāl khwurdah」である。拝火教徒、あるいは異教徒の総称としても用いられる gabr は、聖者伝などに見られる逸話の中ではしばしばスーフィーの奇跡によって改宗する存在として現れるが、アッタールの *Tadhkirat al-Awliyā'* においてはスーフィーに叡智を授ける存在として描かれているという [Neale 2009]。『サイイドたちの美德』に見られるこの逸話は、既存のペルシア語文学に見られる gabr のイメージが組み合わさったものと言える。また、初出時のみ jūgi の語が見られる点については、異教徒を指す際に、gabr という語より、インドの異教徒としてより身近な jūgi が選択されるようになっていく過程を示すものかもしれない。

の異教徒は直ちに信仰告白の言葉を唱え、イスラームに改宗し、真実に連なる者の一人となった。また、この後、スルタン・シャムスッディーン・イルトゥトゥミシュは、サイイドたちの権利について確固とした信頼と誠実な考えを持ち、度々以下のように言っていた。「終末の時、我々は知識あるシャイフからは救いを得られないだろう。終末の日に有効なのは預言者の子孫たちである。使徒に背くことを受け入れる者は、どんな預言者も救わず、どんな聖者も側に呼ばないだろう」。そして、特別な場合や公衆の前で、サイイド・ムバーラク・ガズナヴィーを常に自身の左に座らせ、サイイド・クトゥブッディーンを右に座らせていた³⁸⁾ [Te: 6b, 54a-b; To: 138-140]。

この逸話では、サイイド崇敬が良き信仰実践の一つであるということが、スルタンによるサイイド保護の実施が異教徒の改宗の契機になる、という形で示されている。また、スルタンはムハンマドの「代理」と位置付けられており、それ故ムハンマドの子孫たちに年金を与えるといった優遇政策をとることが求められている。君主にとって、サイイド崇敬やサイイド保護は自らの信仰を守るだけではなく、正しいムスリム君主としての姿勢を示すための方法だと位置付けられていると言えよう。イルトゥトゥミシュ時代に実際にサイイド優遇制度が存在したのかはさておき、作品のまとめと言える位置にこのような逸話を配置したダウターバーディーが、イルトゥトゥミシュのサイイド崇敬への姿勢を、支配者が手本にするべきものとみなしていることは明らかである。インド各地域へのスーフィーの移住の事例やそれらの地域での在地言語の発展を通して、14世紀にデリー・サルタナトの地域化が進んだと論じたディグビーは、地域文化の独自性を強調し、各地域の在住者は必ずしもデリーの権威を好意的に受け止めていたわけではないことを指摘した [Digby 2003: 248; Digby 2004: 316]。一方、『サイイドたちの美德』は、15世紀インドのムスリム地方王朝下において、デリーの権威と距離を取りその文化との差別化を図る傾向だけではなく、デリーの学術伝統を

38) これらのサイイドは、実在の人物が下敷きになっている可能性がある。サイイド・ムバーラク・ガズナヴィーは、イルトゥトゥミシュ時代に活動し、学識者として知られた Nūr al-Dīn Mubārak Ghaznawī が想定されているとみられる。彼は後世の伝記ではイルトゥトゥミシュ時代のシャイフルイスラームとされているが、同時代史料の *Ṭabaqāt-i Nāṣiri* にはそのような記述は見られない [AA: 34; TFS: 41, 44]。サイイド・クトゥブッディーンに関しては、イルトゥトゥミシュの息子、スルタン・マフムード・シャー (r. 1246-1266) と、ギヤースッディーン・バルバン (r. 1266-1287) の時代にデリーのシャイフルイスラームに任命された Sayyid Qutb al-Dīn が考えられる [TN: I, 467, 492, TFS: 111, 348; 二宮 2007: 8-9]。ただし、彼がイルトゥトゥミシュの時代にムバーラク・ガズナヴィーと並んでスルタンの側に席を占めるということは考え難い。なお、両者についてはチシュティ派のスーフィーの語録や伝記にも言及が見られる [FF: 364, 401; FF (Ftr.): 353, 422; FF (Ltr.): 296-297, 344-345; KM: 226, SA: 61]。中でも、ニザームッディーンの語録 *Fawā'id al-Fu'ad* 中の逸話には、サイイド・ムバーラクがスルタン・イルトゥトゥミシュに近い席次を得ていたという描写が見られる。さらに、同じ逸話にはクトゥブッディーンというカーディーが登場する [FF: 401; FF (Ftr.): 421-422; FF (Ltr.): 344-345]。『サイイドたちの美德』の逸話と *Fawā'id al-Fu'ad* の逸話との関連性の高さは、ベルシア語スーフィズム文献が、南アジアにおけるベルシア語文学の逸話の伝統に大きく寄与していることを示唆する。

継承してその文化に範を取ろうという志向も存在したことを示している。

ダウラターバーディーは、『サイイドたちの美德』の中で、サイイド崇敬の正当性を主張し、サイイドの保護を良きイスラーム社会の要件としているだけではなく、良き（スンナ派の）イスラーム社会を実現するために14世紀までのデリー・サルタナトというモデルに従うことを説いている。そして、トゥグルク朝期までに蓄積された学術伝統を活用しながらダウラターバーディーが正当化を図ったサイイド崇敬は、北インドのムスリム社会の中に広く浸透していった。『サイイドたちの美德』からは、トゥグルク朝の崩壊後に地方都市ジャウンプルを中心に成立したシャルキー朝において、デリーを中心に形成されたインド・イスラームの伝統が継承され発展していった過程を窺い知ることができる。

参考文献

- Te: Shihāb al-Dīn Aḥmad b. ʿUmar al-Dawlatābādī, *Manāqib al-Sādāt*. Ms: No. 14134, Majlis Library, Tehran.
- To: Shihāb al-Dīn Aḥmad b. ʿUmar al-Dawlatābādī, *Manāqib al-Sādāt*. Ms: Persian No. 1904-2435, Maulana Abul Kalam Azad Arabic and Persian Research Institute, Tonk.
- AA: ʿAbd al-Ḥaqq Dihlawī, *Akhhār al-Akhyār*. (ed.) ʿAlim Ashraf Khān, Tehran: Anjuman-i Āthār wa Mafākhīr-i Farhangī, 1383HS (2005).
- Āʾin: Abū al-Faḍl, *Āʾin-i Akbarī* 2 vols.. (ed.) H. Blochmann, Calcutta: Asiatic Society of Bengal, 1867-1877.
- FF: Amīr Ḥasan Sizjī, *Fawāʾid al-Fuʾad*. (tr.) Ḥasan Thānī Nizāmī Dihlawī. New Delhi: Khwāja Sayyid Ḥasan Thānī Nizāmī Dihlawī, 2007.
- FF (Ftr.): Faruqī, Z-H. (tr.), *Fawaʾid al-Fuʾad: Spiritual and Literary Discourses*. New Delhi: D. K. Printworld, 1996.
- FF (Ltr.): Lawrence, B. B. (tr.), *Fawaʾid al-Fuʾad (Nizam al-Din Awliya: Morals for the Heart)*. New York: Paulist Press, 1992.
- FTK: Farīd al-Dīn ʿĀlim, *Fatāwā-yi firūz shāhī* 20 vols.. (ed.) Shabīr Aḥmad al-Qāsimī. Deoband: Maktabat al-Zakariyā, 2014.
- GA (P): Muḥammad Ghawthī Shaṭṭārī, *Gulzār-i Abrār*. (ed.) Muḥammad Zakī. Patna: Khuda Bakhsh Oriental Public Library, 1994.
- GA (T): Muḥammad Ghawthī Shaṭṭārī, *Gulzār-i Abrār*. (ed.) Yūsuf Big Bābāpūr. Tehran: Mawzah wa Markaz-i Asnād-i Majlis-i Shūrā-yi Islāmī, 1391HS (2012).
- GI: Mullā Muḥammad Qāsim Hindū Shāh, *Gulshan-i Ibrāhīmī* 2vols.. Kanpur: Nawal Kishor, 1884.
- KM: Ḥamid Qalandar, *Khayr al-Majālis*. Khaliq Ahmad Nizami (ed.). Aligarh Muslim University, 1959.
- NK: ʿAbd al-Ḥayy, *Nuzhat al-Khawāṭir* 7 vols.. Ḥyderabad: Maṭbaʿat Majlis Dāʾirat al-Maʾārif

- al-‘Uthmāniya. 1962–1981.
- SA: Sayyid Muḥammad b. Mubārak Kirmānī (aka Amīr Khwurd), *Siyar al-Awliyā’*. Dehli: Maṭba‘-i Muḥibbi-i Hind, 1302AH.
- SF: *Sirat-i-Firozshahi*. Patna: Khuda Bakhsh Oriental Public Library, 1999.
- Tamhid: Brodersen, A. (2018) *Zwischen Māturidiya und Aṣ‘ariya: Abū Ṣākūr as-Sālīmī und sein Tamhid fī bayān at-tauḥīd*. Piscataway: Gorgias Press.
- TFS: Ḍiyā’ al-Dīn Baranī, *Tārīkh-i Firūz Shāhī*. (ed.) S. A. Khan. Calcutta: Asiatic Society of Bengal, 1862.
- TN: Minhāj Sirāj Jūzjānī, *Ṭabaqāt-i Nāṣiri* 2 vols.. (ed.) ‘Abd al-Ḥayy Ḥabībī. Kabul: Anjuman-i Tārīkh-i Afghānistān, 1923.
- Arberry, A. J., al-Khargūshī. In: *Encyclopaedia of Islam*, 2nd. Brill.
- Ahmad, Z. (1968) *The Contribution of Indo-Pakistan to Arabic Literature: From Ancient Times to 1857* Reprinted Edition. Lahore: Sh. Muhammad Ashraf.
- Brockelmann, C. (1937–1949) *Geschichte der arabischen Litteratur*. Leiden: Brill.
- Brodersen, A. (2020) New Light on the Emergence of Māturidism. *Journal of Islamic Studies* 31–3, pp. 329–357.
- Burton-Page, J., D̲jawnpur. In: *Encyclopaedia of Islam*, 2nd. Brill.
- Digby, S. (1994), Anecdotes of a Provincial Sufi of the Delhi Sultanate, Khwāja Gurg of Kara. *Iran* 32, pp. 99–109.
- Digby, S. (2003) The Sufi Shaikh as a Source of Authority in Medieval India. In: Eaton, R. M. (ed.), *India’s Islamic Traditions, 711–1750*. New Delhi: Oxford University Press, pp. 234–262.
- Digby, S. (2004) Before Timur Came: Provincialization of the Delhi Sultanate through the Fourteenth Century. *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 47–3, pp. 298–356.
- Ernst, C. W. (2004) *Eternal Garden: Mysticism, History, and Politics at a South Asian Sufi Center* (2nd ed.). New Delhi: Oxford University Press.
- Flatt, E. J. (2019) *The Courts of the Deccan Sultanates: Living Well in the Persian Cosmopolis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ghaneabassiri, K. (2008) The Epistemological Foundation of Conceptions of Justice in Classical *Kalām*: A Study of ‘Abd al-Jabbār’s *al-Mughnī* and Ibn al-Bāqillānī’s *al-Tamhid*. *Journal of Islamic Studies* 19–1, pp. 71–96.
- Hadi, N. (1995) *Dictionary of Indo-Persian Literature*. New Delhi: Indira Gandhi National Center for the Arts.
- Hussain, S. E. (2017) *Shiraz-i Hind: A History of Jaunpur Sultanate*. New Delhi: Manohar.
- Morimoto, K. (2012) How to Behave toward Sayyids and Sharifs: A Trans-Sectarian Tradition of Dream Accounts. In: Morimoto, K. (ed.), *Sayyids and Sharifs in Muslim Societies: The Living Links to the Prophet*. London and New York: Routledge, pp. 15–36.

- Munzawi, A. (1983-1992) *A Comprehensive Catalogue of Persian Manuscripts in Pakistan* 14 vols.. Islamabad: Iran Pakistan Institute of Persian Studies.
- Neale, H. S. (2009) The Zoroastrian in 'Attār's *Tadkiratu'l-Awliyā'*. *Middle Eastern Literatures* 12-2, pp. 137-156 (DOI: 10.1080/14752620902951140).
- Nizami, K. A., al-Dawlatābādī. In: *Encyclopaedia of Islam*, 2nd. Brill.
- Nizami, K. A., Sharḳīs, In: *Encyclopaedia of Islam*, 2nd. Brill.
- Orsini, F. and Sheikh, S. (eds.) (2014) *After Timur Left: Culture and Circulation in Fifteenth-Century North India*. New Delhi: Oxford University Press.
- Saeed, M. M. (1972) *The Sharqi Sultanate of Jaunpur: A Political & Cultural History*. Karachi: University of Karachi.
- Sheikh, S. (2010) *Forging a Region: Sultans, Traders, and Pilgrims in Gujarat, 1200-1500*. New Delhi: Oxford University press.
- Steinfels, A. M. (2012) *Knowledge before Action: Islamic Learning and Sufi Practice in the Life of Sayyid Jalāl al-Dīn Bukhārī Makhdūm-i Jahāniyān*. Columbia: University of South Carolina Press.
- Storey, C. A. (1970-) *Persian Literature: A Bio-bibliographical Survey*. London: Luzac.
- Wheeler, B. M. (2003) Identity in the Margins: Unpublished Ḥanafī Commentaries of the *Mukhtaṣar* of Aḥmad b. Muḥammad al-Qudūrī. *Islamic Law and Society* 10-2, pp. 182-209.
- Zadeh, T. (2012) *The Vernacular Qur'an: Translation and the Rise of Persian Exegesis*. New York: Oxford University Press.
- Ziad, W. (2017) Transporting Knowledge in the Durrani Empire. In: Green, N. (ed.) *Afghanistan's Islam*. Oakland: University of California Press, pp. 105-126.
- 二宮文子 (2007) 「デリー・サルタナト期のシャイフルイスラーム：サルタナト政権のスーフィー登用に関する一考察」『西南アジア研究』66, 1-17 頁.
- 二宮文子 (2023) 「ダウラターバーディー作『サイイドたちの美德』に見える 15 世紀北インドのサイイド論」『東洋文化』103, 55-73 頁.